

Environment Coping Forum News Letter

南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究

発行：京都大学東南アジア研究所 編集：南出和余
 住所：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
 URL：http://ecf.cseas.kyoto-u.ac.jp/

～ECF第4回ケーススタディ報告～



ガイバンダ県ジウムナ川流域中州地域、ノアカリ県ハティア島、ボリシャル県に続き、第4回ケーススタディは、キシエルゴンジ県において行われた。今回は2009年8月7日から14日までの1週間をかけ、ケーススタディの実施と合わせて、4回のケーススタディから得られた知見から、ECF(Environment Coping Forum)の使命と目的の見直し、および今後に向けてのアクションプランの作成を行った。11のECFメンバーNGOから16名、日本からは研究者チーム4名が参加した。

ケーススタディの流れ

第1回から3回までと同様に、ケーススタディでは、①POPIによる活動紹介、②フィールドスタディ(3日間)、③参加者の印象に残った優先課題の整理と分析、の手順をとった。

POPIの活動には以下の方針が挙げられる。



- ・ マイクロクレジット
- ・ 環境と災害対策
- ・ 教育
- ・ 保健衛生
- ・ 人権
- ・ 社会開発

中でも、ハオールという自然環境との共存と対応が不可欠な地域にあって、災害対策が活動のメインとなる。しかし、災害対策とは短期長期の意味をもち、災害救援(リリーフ)として受けた海外からの支援を用いて、ハオールで暮らす人びとの生活改善の取り組みも実践している。災害に強い生活環境を整えることは、長期的にみて防災の役割を果たすことは言うまでもない。Careをはじめとする国際NGOと現地NGOの有機的な連携パターンを成している。

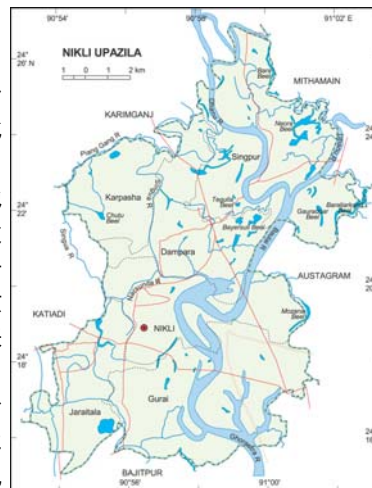
フィールドスタディでは、メグナ河に通じるボウラ川流域(Nikli郡)のハオールにて、3グループに分かれて、以下の点を主として調査を行った。

- 1) POPIの活動実態
- 2) サービス提供システム
- 3) 人びとの受容と対応
- 4) 活動の継続的な展望
- 5) ハオール地域における主要課題

調査地の概要

バングラデシュ北西部シレット地区からダッカ地区北部(キシエルゴンジ、シレット、ネトロコナ県の辺り)を跨ぐ地域に、ハオールと呼ばれる大規模湿地帯がある。ハオールとは、ベンガル語の海を意味する「シャゴール」に由来するとされ、雨季にはインド・アッサム地方から流れ込む雨水を受けて、「陸の海」のような広大な湛水面が出現す。さらに、乾季に水が引いた後も、湖沼が残り、大規模な湿地帯を形成する。洪水による大湛水面に吹く風が起す波や深湛水など、自然災害の影響を受けやすいことは言うまでもなく、とくに雨季には、作物の作付は、浮稲を除き、全く不適となる。

この地域で1991年から活動するPOPI (Peoples Oriented Program Implementation)は、ハオールで生活する人びとの生活改善を積極的に進めている。



参加者

【ECFメンバー (11NGO)】

1. Murshed Alam Sarkar: POPI/ED(8/8)
2. Shahab Uddin: POPI
3. Shah Md. Nazmul Haque: POPI
4. Paresh Kumar Sharma: POPI
5. Nanigopal Sarkar: UDOY
6. Md. Mizanor Rahman: JRDS
7. Md. Sazzad Kadir: TMSS
8. Md. Ayub Ali Mridha: BSUS
9. Kanchana Rani Das: CHCP
10. Hafizur Rahman: PAPRI
11. Md. Hamidul Haque: DUS
12. Md. Sharif Ullah Bhuyan: Projukti Peeth
13. Md. AbuHomjala Rana: AAN(-8/12)
14. Pankaj Sarkar: SATU(8/11-)
15. Bimal Kanti Kuri: SSS
16. Nazmun Naher Kaisar: ECF Secretariat Officer

【研究者チーム】

17. 安藤和雄：東南アジア研究所准教授
18. 矢嶋吉司：東南アジア研究所研究員
19. 南出和余：日本学術振興会研究員 (地域研究統合情報センター)

オブザーバー

20. 宮本慎二：滋賀県立琵琶湖博物館研究部 環境史研究領域

スケジュール

8月7日(金)

18:00 集合
21:00 夕食

8月8日(土)

8:00 朝食
9:00 開会挨拶
参加者自己紹介
9:30 経緯説明/今後の流れ
10:40 スケジュール確認
10:50 第3回ケーススタディ報告
11:15 休憩

Session 1

11:40 POPI活動紹介
13:30 昼食/休憩
15:15 ウォーミングアップ
15:30 POPI活動 質疑応答
16:40 休憩

Session 2

17:00 ECF structure討議
18:45 終了
20:30 夕食

Session 3~フィールドスタディ~

8月9日(日) ①Chatirchar
8月10日(月) ②Goradigha
8月11日(火) ③VDC&Green Bank
&Chatirchar

8月12日(水)

8:00 朝食

Session 4

9:30 レビュー
9:40 KJ法の説明
9:50 各自印象項目を書く
10:30 休憩
11:00 KJ法一クラスター整理
11:30 優先項目発表
13:30 昼食
14:50 ウォーミングアップ
15:00 優先項目の発表(続き)
17:10 休憩
17:30 優先項目の分析
18:15 終了
21:00 夕食

8月13日(木)

8:00 朝食

Session 5

9:30 アクションプラン作成説明
10:45 グループディスカッション
(アクションプラン作成)
グループ発表
12:50 昼食
13:30 討議
18:30 夕食
21:00 夕食
22:00 アクションプラン討論(続き)
23:30 クロージング
24:00 終了

8月14日(金)

8:00 朝食
9:00 出発

優先課題の発掘

NAME	MC	Env.	Edu.	Health	HR	SD	Agri.	Other	Remarks for others
Minamide		3				1		2	Livelihood
Ando		2				3		1	Daily lifestyle
Nanigopal		1	2	3				4	
Rana		2				3		1	Livelihood
Yajima		1			3			2	Livelihood
Miyamoto		1,2,3							
Sazzad			3	2				1	Communication
Ayub		2	1	3					
Mizanor		1		2		3	4		
Pankaj		1					3	2,4	Livelihood
Hafizur		2				1,3			
Shampa		1	2	3					
Sharif		1		3		2			
Hamidul		1				2,3			
Kanchana		2		3				1	Livelihood
Bimal		1				3		2	Livelihood
Paresh						2		1,3	Livelihood
Nazmul		1		2		3		4	Livelihood
No.1	0	10	1	0	0	2	0	5	
No.2	0	6	2	3	0	3	0	4	
No.3	0	2	1	5	1	7	1	1	
Total		18	4	8	1	12	1	10	

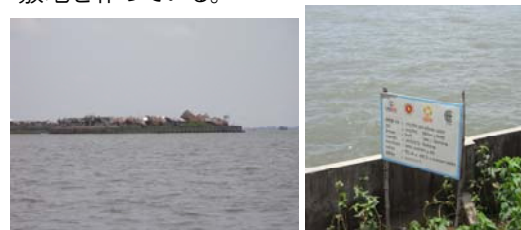
参加者が、3日間のフィールドスタディを振り返って最も印象に残った取り組みや課題、人びとの実践を、各自3つずつ挙げた。これまでのケーススタディと同様に、KJ法を用いて収集した結果は、上記の表の通りである。分類カテゴリーには、POPIの活動分野である①マイクロクレジット:MC、②環境と災害対策:Env.、③教育:Edu.、④保健衛生:Health、⑤人権:HR、⑥社会開発:SD、の6つに⑦農業:Agri.、⑧その他:Other、を加えて8つとした。

優先順位から見た考察(安藤和雄)

優先順位1,2,3の単純集計では、「環境と災害リスクの軽減」が18ポイント、「社会開発」が12ポイント、「その他」が10ポイントとなっている。しかし、詳しく検討すると、優先順位1は、「環境と災害リスクの軽減」が10ポイントで、「その他」が5ポイントとなっている。「その他」のほとんどは、「暮らしと生活様式(Livelihood and Life Style)」であり、約3分の2の参加者が、環境問題と災害リスクの軽減プログラムに対し

て、優先順位1の印象票を投じている。

そのほとんどが、屋敷地を波浪の浸食被害から守るためにPOPIがUSAIDやCAREなどと一緒に行った、コンクリート製の防波壁である。防波壁完成後に、POPIが社会開発プログラムの一環として各集落に設置したVDC(Village Development Cell/Committee)がイニシアティブをとって、住民が自主的に資金調達し、乾季に川から泥や砂を流水客土(コルマージュの一種)して雨季の湛水にも水没しない屋敷地を作っている。



さらに、屋敷地を波浪から守るためには、コンクリート壁だけでなく、波浪にさらされる屋敷の土の法面に、竹を組んだ格子を敷き、そこにイネ科の多年草Chaira(チャイラ)と呼ばれる草

をつめて作られた伝統的な人工波浪防除カバー「Gael:ガエール」を作って備える。チャイラは、ガエールで使われた後、水がひいた耕地にその莖を小さくきって挿し木のように植え、施肥をして育てられる。そして洪水期に再びガエールを作るために耕地から集められる。また、POPIは、シレット地方



シュナムゴンジ(Sunamganj)県のハオールで伝統的に波浪から屋敷地を守るために植林されたいたKoroshi(コロシ)の木の導入も2年前から試みている。コロシの木は成長が早く、「コンクリート壁は壊れる心配があるが、コロシの木は『永久』である」という村人のコメントにあるように、壊れる心配もなく、雨季には土砂を堆積させる効果もあると認められている。



これらの3つの方法は、いずれも波浪を防ぐ技術である。屋敷地を雨季に確保することが、ハオールの村々での暮らしのボトルネックとなっている。したがって、この3つの技術が、調査参加者の印象にもっとも強く残ったのも納得できるだろう。

また、その他「暮らしと生活様式」に約3分の1の票が集まったのは、狭い屋敷地ですれ違うのも困難なほどに建てこんだ家々や、人が生活する部屋と牛部屋が隣接するように作られているが、牛糞は日に3度片づけられ、いつも綺麗な状態に保たれていたり、トイレが完備し、尿尿の悪臭さえしない衛生的な生活環境が保たれていることへの印象だった。

また、糞を円形に敷き、牛糞を薄く広げ、直径90cmほどの薄い皿状の牛糞(Gobar:ゴボール)で燃料(Chota:チョタ)を作って乾燥させ、年間を通じて利用する。「ゴボール・チョタ」は、洪水時にも携帯燃料として使われる。洪水被害をうけて船で避難する際の携帯竈も、ゴ



ボール・チョタを燃す土製「Arga Chura:アルガ・チュラ」や、種火として燃した木を置き、もみ殻を燃料として使う、アルミ製の「Tiner chura:ティネール・チュラ」(ミルクの空き缶を利用)などが工夫されている。さらに、ハオールでは葉菜栽培が困難なため、周辺の村々で栽培されるジュート(在来種のみ)の葉を大目に購入し、2~3日間日干しし、保存携行食として食す。油で痛めると副食となる。他にも、何も副食が入手できない洪水災害時には、ウコンの粉を炙り、唐辛子やニンニク、玉ねぎを切って混ぜ、ふりかけのようにして飯にまぜて食べる。屋敷地が狭いので、乾季に栽培された稲は、脱穀後すぐに田で販売されるのが一般的で、モミ米が年間食用の8割を占める世帯では、一度にパーボイルし、竹で編んだ筒の表面を牛糞をぬって作った貯蔵籠(Gola:ゴラ)に蓄える。ゴラは高床の台に置かれる。ネズミの被害を防ぐために、ゴラが置かれる場所は2ヶ月ほど前から牛部屋として使い、牛の尿尿を土にしみ込ませて牛に踏ませる。そうするとネズミが来ないという。牛部屋を生活部屋に隣接することで得られた女性の知恵である。このように、ハオールの環境にあって、年間を通じて狭い屋敷地で牛と共存することや、洪水時を切り抜ける暮らしの知恵は、技術的対応に劣ることなく印象深い。優先順位2のポイント数にこの傾向が強く表れていることから、参加者の誰もが、洪水被害を切り抜ける技術や生活の工夫こそが、ハオールの環境で生き抜くために必須であることを認めていると言えよう。

優先順位3になると、社会開発に7ポイント、健康衛生に5ポイントの票が投じられている。社会開発プログラムについては、訪れた2つの集落の女性たちが、質疑応答の場で非常にしっかりとした口調で意見を述べていたことを、参加者の多くが取り上げた。これには、「Green Bank」を中核とする女性たちのグループ活動「Group Federation Program」と、「Village Development Cell」の組織化が相乗効果をもたらしていることが指摘された。POPIによれば、女子の若年結婚の禁止に関する啓発活動や、屋敷地の流水客土事業、村人参加による植林事業、波浪から屋敷地を防ぐガエール作成のための予算の活用など、地方行政がもっている資源を利用するために村人たちが積極的にアクセルするようになってきているという。

このように、集落住民から集められた総額360万タカ(=約640万円)で実現した屋敷地、屋敷地の完成によって雨季の定住が可能となったゴラディガ集落(Goradigha)、整然としたガエールを目にする時、VDCの活動が確かに実を結んでいることに誰もが強い印象を持った。健康衛生については、一部でみられたトイレと手押しポンプの隣接や、トイレの近くでの沐浴や水遊び、牛部屋の尿尿処理を工夫できるのではないかと、といった意見票もあったが、参加者の多くが挙げた印象は、雨季には離れ小島になる集落では他のNGOや行政からの保健サービスが行き届かない現実の中で、たとえ月2度であっても



POPIが行っている訪問サービス、女性の村医者(パラメディック・ドクター)によるサービスや船を保健室として改造したHealth Service Boat(2人の女性村医者が乗船)は、女性たちの健康問題解決に大きな役割を果たしている。(終)

ECF Action Plan

ケーススタディと並行して、ECF(Environment Coping Forum)の今後の活動について、参加者の間で話し合いがもたれた。ECFは、バングラデシュ国内14の中小規模NGOが集い、環境と開発という二律背反的問題への対応と解決策を実践的経験から考えるために作られたフォーラムである。これまで4つのケーススタディを行うなかで、参加者はNGO職員としての経験を活かし、当事者的視点から、各活動と実践を捉えてきた。今後は、これまでの気づきを活かし、14のNGOが協力し合って、新たなモデルと実践を構築していくことを目指す。そのために、今回は、ECFの使命、目的、そして具体的な活動について話し合い、以下のことを決定した。

VISION:

To ensure sustainable development and improve livelihood by people's coping mechanism with environment.
: 人びとが環境と向き合うことによって、持続可能な開発を確立し、生活を改善することを目指す。

MISSION:

- ▶ To make environment friendly, resilient and adoptable.
- ▶ To raise awareness of mass people on environment.
- ▶ To establish network and collaboration among development organizations.
- ▶ To improve and diversify people's livelihood through action oriented program.

こうした共通理解の下、2つのアクションプランを立てた。洪水やサイクロンをはじめ自然災害に頻繁に見舞われる4地域でケーススタディを経験した参加者に共通して聞かれたのは、こうした地域においては、まず住民を巻き込んだ持続的な環境対応策の構築が重要であり、そのうえで、健康管理や教育、生活改善といったソフト面の取り組みが必要であるとの理解であった。

Action Plan:

PACT: Participatory Afforestation and Community Transformation

HELP: Health Education and Livelihood Program

これを、以下の具体的プロジェクトとして、ケーススタディを行った4つの地域で実施する予定である。実施に当たっては、国際援助機関、研究機関、大使館等からの資金協力を必要とするため、プロジェクトプロポーザルを作成していく。

Projects:

1. Under PACT

- ▶ Karach Tree Plantation (地域:ハオール)
- ▶ Community Killa Pond (ハティア島)
- ▶ Community People's Awareness Building(ポリシャル)
(Improve warring system, building social harmony)
- ▶ Social Afforestation (ガイバンダ、ハティア島)



2. Under HELP

- ▶ Training: Tailor, Primary Health Care, TBA, Vocational (全ての地域)
- ▶ Agriculture and livestock promotion (ガイバンダ県)
- ▶ Improved Livelihood of Fishermen Community (ハティア島、ポリシャル)
- ▶ Housing and Sanitation for Fishermen (ハティア島、ハオール、ポリシャル)
- ▶ Community Boat for School Students and Transportation (ポリシャル)
- ▶ Cultivation Processing and Marketing (ポリシャル)
- ▶ Safe Water and Sanitation (全ての地域)

また、ECFメンバーである14のNGOは、それぞれに専門活動分野をもっており、各分野における経験とノウハウを活かし、協力し合うことがECFの強みである。

ECF各NGOの特徴(貢献できる分野)

1. AAN: Arsenic Mitigation
2. BDP: Education
3. BSUS: WATSAN (Water and Sanitation), Health and Nutrition, Children's Education
4. CHCP: Health, Woman Empowerment
5. DUS: Human Rights, Disaster Risk Reduction
6. IDF: Work with Tribal Community
7. JRDS: Cultural Program, Collaboration with Village Development Community
8. PAPRI: Disability People's Development and Education
9. POPI: Hawar Development
10. PP: WATSAN
11. SSS: Micro-Credit and Woman Empowerment
12. SKS: Char Development
13. TMSS: Micro-Credit, Vocational Training
14. UDOY: WATSAN, Social Afforestation

ODAをはじめとする国際援助機関に対しては、評価基準や評価の有用性に関する議論は別として、評価が多くなされている。一方、NGOについては、援助する側もされる側も、活動に対する評価体制は整っていないのが現状である。ECFにおける14のNGOによるフォーラムは、各NGOの取り組みに対する当事者的視点からの評価、フォーラム内での助言協力、さらには、対外的アピール(とくに支援獲得における)においても有効であると考えている。研究者チームは、彼らの実践から多くを学ぶとともに、それを学術的見地から体系化し、オーソライズすることができればと願っている。

(報告:南出和余)